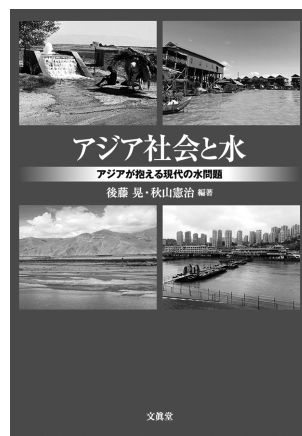


『アジア社会と水 —アジアが抱える現代の水問題—』

文真堂、2018年、296頁

後藤 晃・秋山憲治 編著



本書は、神奈川大学アジア研究センターの共同研究「アジアの水に関する総合的研究」の5年間（2013年～2017年度）の研究成果をまとめたものである。

水は人々の命を支えているもっとも重要な資源であり、人は生活のさまざまな場面で水と深く関わってきた。現在、地球上の水は、97.5%が海水などの塩水で、淡水は2.5%しかない。そのうち、氷河等に1.76%、地下水として0.76%、河川、湖沼などが0.01%であると言われている。我々が活用できる水は、地球上のほんのわずかな水に過ぎない。限られた資源である世界の水に対し、多くの問題が起きている。

水需要は人口の増加や経済規模の拡大でこの半世紀足らずの間に2倍に増え、将来も同等のペースで増え続けている。しかし、世界の水は偏在しており、水不足に悩む国も多い。開発による水質汚染や気候変動による干ばつや洪水、国際河川のダム建設をめぐる国家間紛争、地下水の過剰開発による枯渇や地盤沈下など、水をめぐる環境が厳しさを増している。今世紀を「水の（危機の）世紀」とも言われている。

水をめぐる研究テーマは、多岐にわたっており、すべてを網羅して取り扱うことは不可能である。本書は、経済や人類学、建築、歴史、環境問題を専門とする研究者の参加による共同研究である。執筆者は専門領域を異にするためアプローチの仕方は一様ではなく、各自の問題意識と関心からアジアの水に向き合っている。このため各章間の関連は必ずしもよくないが、多様な観点から多角的に捉えようとしている。

以下、本書の構成と執筆者、各論文の要旨を簡単に紹介する。

まえがき（後藤 晃）

第一部 現代の水問題

- 第1章 「アジアの持続可能な水環境—水の現状と課題」（佐藤 寛）
- 第2章 「チベット高原の経済開発と水問題—国際河川との関係より—」（秋山憲治）
- 第3章 「乾燥地の地下水開発と水危機—イランの事例から—」（後藤 晃）
- 第4章 「日本の近代水道の創設—横浜水道を中心に—」（内藤徹雄）
- 第5章 「住民参加による多自然型川づくり—日本・源兵衛川と韓国・水原川を事例として」（山家京子・鄭一止）
- 第6章 「流域ガバナンスの変遷—メコン河を事例に考える—」（川瀬 博）

第二部 水と社会

- 第7章 「植民地朝鮮・全北湖南平野における水利組合の設立過程」（松本武祝）
- 第8章 「タイにおける水と人のかかわり—その多様性と多義性をめぐって」（高城 玲）
- 第9章 「ミエン・ヤオ族の儀礼における水の機能—中国・ベトナム・タイ広域比較分析の取り組み—」（廣田律子）

第 10 章「日中文化交流の一側面：『西湖佳話』と津藩の治水事業」（鈴木陽一）

第 11 章「物流と海洋：海運と国際調達の新たな役割」（田中則仁）

おわりに（秋山憲治）

第一部「現代の水問題」では、水問題の現状を概観し、現代のアジアで課題となっている水をめぐる問題をテーマとする。

第 1 章「アジアの持続可能な水環境」は、20 世紀後半頃から地球の自然環境の変化が拡大し、地球温暖化、異常気象、砂漠化、巨大台風の発生、ゲリラ豪雨などアジアが抱えている水環境の悪化を、各国の事例に基づき紹介している。

第 2 章「チベット高原の経済開発と水問題」では、地政学上重要なチベット高原の経済開発が水資源や環境をどう変えたのか、またアジア諸国に流れ出す国際河川のメコン川を中心にダム開発が下流域の国々にどのような影響を及ぼしているかを論じている。

第 3 章「乾燥地における地下水開発と水危機」では、ディーゼルポンプで揚水する井戸の普及でこの半世紀に地下水開発が進み農業開発が大きく進展した乾燥地域の水資源問題を、地下水が枯渇の危機に瀕している実情を、イランの事例で具体的に示している。

第 4 章「日本の近代水道の創設」では、日本における水道事業の嚆矢となった横浜の水道創設について論じている。なぜ横浜で近代水道が誕生したのか、日本の水道事業にとっての歴史遺産ともいえるべき事業の時代背景と建設のプロセスを紹介する。

第 5 章「住民参加型による多自然型川づくり」では、開発の時代に汚染され人々を疎外してきた川を、人々の生活に豊かさを与え自然を感じられる憩いの場として、生態系を育む自然空間に還元していく市民参加のプロセスを、日本と韓国の 2 つの事例で紹介する。

第 6 章「流域ガバナンスの変遷」では、国際河川メコン川の流域ガバナンスについて、メコン流域の当事者国家や国連などによる上からの統治と地域社会の下からの自治の交わるころの協治に注目して論じている。

第二部「水と社会」では、アジア社会が水社会としての側面をもち、水が社会のシステムや文化に影響を与えてきた。歴史や人類学の対象となる個々のテーマで論じられる。

第 7 章「植民地朝鮮・全北湖南平野における水利組合の設立過程」では、朝鮮・全羅北道湖南平野の 2 水系における植民地下での水利組合事業の展開過程を分析している。用水配分をめぐって日本人大地主間の利害対立や朝鮮人地主・農民などの関係を論じている。

第 8 章「タイ社会における水と人のかかわり」では、タイ社会における水と人のかかわりをその基層や基盤まで含めて多角的に検討し、その多様性（多義性）を考察し、社会の基層に水との関わりがあることを様々な事例をもとに紹介し論じている。

第 9 章「ミエン・ヤオ族の儀礼における水の機能」では、ミエン・ヤオ族は中国南部および東南アジア大陸部の山地で焼畑耕作や移動を繰り返し広く分布しているが、中国藍山県の通過儀礼の還家願儀礼における水の役割を取り上げ、地域的多様性を検証している。

第 10 章「日中文化交流の一側面」では、江戸時代の玉垣村（現・鈴鹿市桜島町）で行われた開墾の経緯や様子を記した「吉澤桜島碑記」に基づき、『西湖佳話』と津藩の治水事業を検討している。

第 11 章「物流と海洋」では、海洋国家日本の過去、現在そして将来の観点から水の役割を考察する。海運と国際経営の視点にたち日本企業の海外事業を取り上げ、海上輸送が製造業の生産体制と物流システムの進化にどのように関わっているかを考察している。

水は、我々の生存、生活に不可欠のものであるとの観点から水を取り上げた。我々の生活と水との関係を、執筆者の専門や興味から論じたもので、歴史的な視点、生活における水、経済における水など、水に関する研究の一断面を取り上げたので、体系だって論じたものでなく、バラバラな印象は否めない。しかし、水に興味を持った所員や客員研究員が、タイや中国、韓国などアジアの国々で現地調査をした

成果の一部でもある。個々のメンバーは、水の研究者というより、政治や経済、歴史、民俗など異なった専門領域を持っており、そうした専門領域からみて水がどのように見えるのかといった視点で論じている。アジアの多様な水的一端を紹介できたのではないかと考えている。

今後、限られた水資源をいかに有効活用するかという視点が必要である。ITを利用した節水、農業における点滴灌漑のような農業イノベーション、水の生産として海水の淡水化なども考えられる。水は公共財であるが、水ビジネスのように市場を通じた対応も考えられる。また、課題は、水不足だけでなく、気候変動による巨大台風や集中豪雨、水害、旱魃などの水被害、自然災害による水リスクもある。水研究は多方面にわたり、捉えどころがなく非常に難しい。しっかりとした分析視点を持たないと、問題をとらえられない。持続的な水利用を可能にするために、水の研究はあらゆる観点から行われなければならない。本書が水研究に少しでも貢献出来たら幸いである。

(あきやま けんじ 客員教授 神奈川大学経済学部非常勤講師)